東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2007 年 3 月 2 日

生まれ変わり-1-

親愛なるムスリムの様。死後、魂が、肉体から別の肉体へ移るのだと見なす考え方を生まれ変わりといいます。アラビア語ではテナースフ、テジェッスム、フルールなどと呼ばれます。

生まれ変わりという考え方においては、魂が受ける報奨もしくは罰は、善行や悪行に応じて魂が人間やその他の生き物に入り、レベルが上げられたり、下げられたりすることです。肉体は魂のいれもののようであり、魂はいれものからいれものへと移っていくのです。

この考え方においては、「魂は大昔に創造され、発達する為にこの世にやってきた。だからこの世で生きる６０年や７０年といった期間はその発達の為には十分ではなく、死後も再びこの世に戻ってこなければならない。人の魂は、肉体から離れた後、地上や上空や水中に生きる動物達の体に入り、存在し続けていく。」とされます。この考え方では、この世は試練の場ではなく、罰を与えられる場のように見なされます。別の表現をするなら、一種の監獄、一つの災いとして見ているのです。そして全ての災難、恵み、幸福などは、前世で行なった善行や悪行の結果と見なされるのです。

ムスリムの様。歴史的には、この考え方はエジプトで最初に現れたものです。ファラオはこの信条を利用し、人々をより服従させようとしたのです。服従しないなら、次の世ではいやな生き物に変えてやる、と脅したのです。後にこの思想はインドへもたらされ、また古代ギリシアでは哲学という衣装を着せられたのです。

イスラームにおいてこの哲学は、シーア派の異端的なグループである「クラーティ　シーア」にも影響を及ぼしています。しかしクルアーンは、この思想について次のように否定をしています。

「だが死が訪れると、かれらは言う。『主よ、わたしを（生に）送り帰して下さい。わたしが残してきたものに就いて善い行いをします。』決してそうではない。それはかれの口上に過ぎない。甦りの日まで、かれらの後ろには戻れない障壁がある。」（信者たち章第９９－１００節）もし、一つよりも多い数の肉体に宿ることができるのであれば、これは生に帰る一つの機会であったことでしょう。しかしクルアーンでは、それが不可能だとされているのです。また他の章では次のように述べられています。「最初の死の外に、そこで（再び）死を味わうことはなく、燃える炎の責め苦から守護されよう。」（煙霧章第５６節）

一方で、もし生まれ変わりが本当にあるのなら、クルアーンでそのことが明確に記されていたはずでしょう。クルアーンでは、信仰の基盤に関して不足するものは何もないのです。生まれ変わりの思想をイスラームの信条と一緒にしようとする者に対し、いくつかの章が論拠として下されています。「あなたがたはどうしてアッラーを拒否出来ようか。かれこそは生命のないあなたがたに、生命を授けられた御方。それからあなたがたを死なせ、更に甦らせ、更にまたかれの御許に帰らせられる御方。」（雌牛章第２８節）

この章句は次のように解釈されます。人は母の胎内にいて、生命のない状態の時に、命を与えられます。人は母の胎内で、そして墓に入れられた後で、二度、生命を与えられるのです。生命のない状態が二度、生命を与えられることも二度なのです。だからこの章句は、生まれ変わりの思想が信仰と全く相容れないものであると共に拒否する意味をも持っているのです。

来週もこのテーマを引き続きます。